尾崎重平君を悼む

東臺の櫻花五片三片と哀れに散り行く卯月の末無情の嵐吹き荒みて、君か高き希望と熱き血潮と慌しく地に委したりしとは、聞くも悲しき極みなりけり。

人生の遺憾は已が希望の水泡に歸するより大なるはなしとせば、君の才を以てして東都に學ぶ未だ一歳ならずして空しく逝ける君が心中、吁！三百里外又誰か知らむや。

嘗ては野球部に選手として遠く麗城に向ひし其雄風、嘗ては武夫原頭に大聲叱咤せし其朗々たる美音、今復何處にて見、何處にて聞かむ。之を悲しむ豈唯故山に君を待ち給ひし老父母のみならむや、吾人の青衾亦爲めに潤ふを覺ゆ。

○正　誤

本誌六〇頁紫五吟社とあるは紫溟吟社の誤植

次號編輯は來る十月十五日と致すべく候に付盛に投稿有之度候